

見抜かれてしまつているとしても、ここはシラを切りとおすまで。

「それともいちいち説明しなきゃわからないほど阿呆なのかよ。北嶋さんに惚れてんだろつて言つてるんだよ」

演技なのか本気なのか、呆れきつたようなため息とともに、山脇が言った。

そんなこと、説明してくれなくて結構だ。

「北嶋さん、男だよ。惚れてるなんて、そんな。そりゃ尊敬してるけど」

史弥がそう返すと、山脇はフンと鼻を鳴らした。

「その程度の言葉で誤魔化せると思つてるんだ？ おまえ脚本家だろ、もうちよつと上手い台詞ないのかよ」

「誤魔化すもなにも、俺は本当に」

「露骨なんだよ。誰だつて見てりや気がつくに決まつてる。甘つたるい顔してほーつと見つめてさあ、みつともないと思わない？ それとも、あの人をたらしこんでもっと仕事まわしてもらおうとも思つてんのかなあ。でもおまえじゃ無理だよな。そりゃ、素人にしちやちよつとばかり綺麗かもしれないけど、それだけだし」

「な——ッ」

軽蔑しきつた瞳を向ける山脇に、さすがに史弥は顔色を変えた。

……どうして。

「いったいなんだって俺が、あなたにそんなことを言われなきやならないんですか」

「目障りだから。今度のドラマだって、なんで無名のおまえが書くんだよ。本当なら北嶋さんになる筈はずだったのに。あの人が久しぶりに書くんじゃないかって噂うわさが飛んで、みんな期待してたんだ」

そんなこと、言われなくたってわかつてる。唇を噛んだ史弥に、山脇なまきは尚なほも責める言葉を続けた。

「北嶋さん、すっごいモテるし。あの人の周りは美人とか綺麗なヤツとかごまんといるんだ。容姿にも才能にも恵まれてる連中でさえなかなか相手にしてもらえないのに、なんでおまえだけ特別扱いされてるんだよ。どういう手を使ってここに潜りこんだのか知らないけどさ、いい加減ほと身の程ほどってものを知ったら？」

ずきん、と心臓こころが痛む。驚おどろ掴つかみにされたような痛みは、きりきりと広がって心の中を黒く染めあげていった。

（——わかつてるよ……）

指摘されるまでもない。力不足など史弥自身が誰よりも知っている。

何度も、もう無理だと思った。諦めて北嶋から離れようと思ったことだってある。

努力などではどうしようもない領域があると実感させられて、到底北嶋にはとどかないとわかっていて、それでもどうしても諦めきれなかったから、せめて自分にできるだけの精一杯を

示そうとここまで続けてきたのだ。

少なくとも、北嶋が「もういらぬ」と言うまで。彼から最後通牒を突きつけられるまでは、ここで頑張つてみたかった。

確かに、不純な動機もある。傍に居るうちにいつのまにか、尊敬から恋愛感情に変わつていった北嶋への気持ちの故に、許されるなら少しでも長いあいだ、傍にいたいと願つて居る。

けれどそれは、気持ちを伝えようとかふり向いて欲しいだとか、高望みをしてのことじゃない。

叶わぬ恋だけど、それでも。せめて見て居るぐらい赦ゆるされたつていいじゃないか。

(そうだよ。俺はずっと、あの人が好きだよ)

厳しくて優しく、溢れる才能があつて。史弥を拾いあげて支えてくれようとする北嶋を、どうして好きになつちやいけないんだ。

彼を好きで居る気持ちは史弥にとってとても大切なものだ。憧れて追いかけて、ずっと見ていたい。それは、こんなふう他人に心の中までずかずかと入りこまれ、罵倒されるようなものじゃない。

憤りと困惑と痛みと。あれこれの感情が一気に噴きあげてきて、カッと目頭めがしらが熱くなる。

「仕事と北嶋さん個人とどっちに執着してんだか知らないけど。あの人だつて鈍くないんだから、あんたの気持ち知つてて無視してんじゃねえの。おまえ拾つて、今さらいらぬなんて言

えないしな。困ってるんじゃない？」

「——ッ」

たたみかける山脇の言葉に、怒りがこみあげてくる。怒鳴ってしまいそうになり、史弥はぎゅつと拳こぶしを握りしめた。手のひらに爪つめが食いこむ。

挑発に乗っちゃいけない。山脇は、史弥が狼狽ろうたえるのが見たいのだ。彼の言動に感情を露あらわにして、傷ついた姿を見せるのを待っているのだ。

落ちつけ、と自分に言いきかせて、史弥は細く長い息をついた。

(そんなに、俺を莫迦ばかにしたいのかよ)

北嶋を好きになるなんて身のほど知らずだと嘲笑あざわらいたいなら、好きナだけ笑えばいい。

(笑われたって、関係ない)

つりあうとかつりあわないとか考えて、好きになったわけじゃない。

うすら笑いを浮かべた山脇へ、くるりと向きなおる。

言うな、認めるな。山脇がなにを言おうと関係ないと頭ではしきりに警告するのに、どうしても収まらない。仕事が欲しいとかとりいろうとか、そんなふうに汚されたのが、どうしても許せなかった。

(ただ、好きナだけなのに)

好きで、なにかが悪い……？

「俺が北嶋さんを好きなのは本当だよ。ずっと好きだった。尊敬してるし、それ以上の、俺にとつてすごく大事な人だ。——もしかしたら許されない想いなのかもしれないけど、凶々しいってわかってるけど、でも、それを非難していいのは北嶋さんだけだ。どんな言葉でも、あなたにはなんにも言われたくない」

一言一句をゆっくりとした声で、史弥は言った。

「……っ。たいした根性してるな。そうやっていい子ちゃんぶって、北嶋さんだけじゃなく尚吾にまでとりいったのかよ?」

史弥の言葉を受けて、山脇が秀麗な顔を歪める。険悪な表情の、射殺そうとするかのような眼差しで睨みつけてきた。

(シヨウゴ、って言った……?)

なんでここに佐伯さんがでてるんだ。史弥は眉根を寄せた。

「なんでッ、おまえばっかり……!」

「そこまでにしとけ、成斗」

不意に遠くから声が聞こえた。びくり、と、史弥も山脇も身体を震わせ、声のしたほうをふり向く。

廊下の向こうから、佐伯がこちらへ歩いてきていた。そして、そのうしろには彼を迎えに行った北嶋の姿も見える。

——！

聞かれた……？ 史弥は瞠目した。心臓が停まりそうだった。嫌な動悸がする。

苦笑を浮かべた佐伯が、青ざめた史弥の視線に小さく手を挙げる。

「ごめんな、史弥ちゃん。こいつがここまで莫迦だとは知らなかったよ」

山脇に歩みよった佐伯は、彼の襟元を掴むとぱん、と音をたてて頬を叩いた。さすがに容姿も商品となる俳優相手だからだろう、さほど力が入っていないようだ。

けれど、その手の何倍も、彼の声は厳しい。

「だって、尚吾がっ」

「俺に不満があるなら俺にあたれ。なんだって関係ない史弥ちゃんに難癖つけるんだ？ 彼の言ったとおり、おまえに人の気持ちに入りこむ権利なんかどこにもないんだぞ」

「そ、……んなことわかってるよ！」

打たれた頬を押さえ、山脇が怒鳴りかえした。

とが咎める佐伯の声も、抗う山脇の声も。史弥の耳を素通りしていく。北嶋の反応が怖くて、今の言葉を聞いただろう彼がどう考えていたのかを知りたくなくて、史弥はその場に凍りついていた。

（聞か、れた……？）

どく、どく、と心臓が激しく動いた。

指先が、酷く冷たくなる。

「わかつてたつてどうしようもないんだよつ。こいつが、へらへらしながらあんたや北嶋さんの傍に居るのが我慢できないんだからしょうがないだろ、なんで、こんなのがいいんだよつ」
「成斗、もういい加減にしろ」

もう一度手を宙にあげて山脇の頬を叩こうとした佐伯を、北嶋が止めた。

「あとはあつちの部屋でやってくれ」

北嶋は奥の部屋を顎で示し、佐伯を促す。うなが頷いた佐伯が山脇を引きずるようにして連れさるのを、史弥は茫然と眺めていた。

リビングに二人きり、残される。

この場から、消えてしまいたかった。

どこまで、聞かれたのだろう。なるべく平淡な声で応答していたはずの史弥はともかく、よく通る山脇の声は、玄関ぐらいまではとどいていたかもしれない。

(だって佐伯さん、ほとんどわかつてたみたいだ)

佐伯は事情の大半を察していたようだ。ならば、一緒にいた北嶋にだけ聞こえていないなんて、都合のいいことはないだろう。

「俺、その」

不自然な沈黙が怖くて口を開いた史弥は、けれどそれ以上言葉を繋げられなかった。

なにを言えはいい。今さら、ずっと好きだったなどと伝えて、傷の上塗りをしてもどつしよ
うもない。

絶対に知られるつもりなんてなかった。姿を見て声を聞いて、怒られて呆れられて、ときど
き優しくしてもらえて、このままがよかったのに。

一ミリだって、動かしたくなかった。ずっとこのままがよかった。

(でも——)

もう、知られてしまったのだ。このままではいられない。どう変わってゆくのか想像できな
いし、想像したくもない。

史弥だって、今までどおりの態度なんてとれなかった。気持ちを知られてしまった以上、ど
んな顔をして彼の横にいろというのだろう。

きつく締まっていたはずの振子ゆびこが、からりと回った。ゆっくりと緩まって、事態を動かして
いく。

史弥が、決してゆきたくなかった方向へ、じわじわと動いていくのを感じた。
きいんと耳鳴りがする。

いつのまに北嶋たちは戻ってきたのか。ドアの開閉する音がしたはずなのに、史弥はまった
く気づけなかった。冷静にと言いきかせていたのだけれどやはり、興奮していたらしい。

少し離れた位置で立つ北嶋は無表情で、なにを考えているかまったく量れない。

「聞いてたんですか」

「ああ、たぶん途中からな。タイミングわからなくて、止められなかった。悪いな」
北嶋の声はいつもどこどこも変わりない。動揺の欠片かけらさえなく、彼がいったいどう思ったのか、まったくわからなかった。

『あの人だって鈍くないんだから、あんたの気持ち知ってて無視してんじゃないかねえの』
山脇の声が耳によみがえった。

知ってて、困ってたんじゃねえの。わんわんと、耳の中で響く。

史弥の顔から血の気が引いていく。ゆらりと視界が歪んだ。

「……………失礼、します……っ」

「おい、史弥」

「すみ、ません。俺、あの。今日だけ、……帰ります」

どうしていいかわからない。

くるりと踵かかとを返し、史弥はその場から走りさった。慌ただしく靴くつを履はき、事務所から逃げる。一刻も早く、自分の姿を消してしまいたかった。

* * *